

◇拠点形成概要

機 関 名	立命館大学、ロンドン大学
拠点のプログラム名称	日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点
中核となる専攻等名	アート・リサーチセンター
事業推進担当者	(拠点リーダー) 赤間 亮 教授 外 22 名
<p>[拠点形成の目的]本拠点は人文学と情報技術の連携を基本スキームに置く。欧米では人文研究にデジタル技術を取入れる「デジタル・ヒューマニティーズ(DH)」と呼ばれる分野が形成されつつあるが、本拠点では、21世紀COEプログラム以来の蓄積の上に、より進んだDHを世界に提案する。海外の日本文化研究は、ネットワーク型の展開を強めており、日本と海外の研究者間での手法や目的における大きな乖離が認識されてきている。グローバルな視点を持ち、海外でも研究活動のできる「日本文化研究者」の育成が急務である。そのために研究コンテンツの世界規模での共有化を実現し、この基盤のもとでの人材交流システムを構築、日本文化・芸術研究の世界的な人材育成のための教育研究機能を歴史文化都市京都に形成する。</p> <p>【教育面】本拠点はDHの枠組を体系化しながら日本文化教育研究の革新を企図している。育成するのは、国内でのDH教育・研究の役割を担い、海外の拠点と連携・協力ができる人材、デジタルアーカイブされた情報を駆使しつつ海外の日本文化研究の動向を理解し、世界規模でリーダーシップの取れる人材である。</p> <p>【研究面】歴史都市京都を核とした日本文化・芸術コンテンツを対象に、DHの手法や考え方に基づいて、人文学研究のさらなる深化を図る。先端的情報技術を最大限に活用して、有機的な日本文化・芸術コンテンツの公開・共有・活用を実践し、世界における日本文化・芸術の研究ポータルとしての役割を担う。</p> <p>[拠点形成計画及び進捗状況の概要]</p> <p>【教育】アート・リサーチセンターを恒常的教育機能を持つ研究所として改編する手続きと、本プログラムのテーマによる独立大学院設立の立案とが、現在進行中である。プロジェクト参加型(体験型)教育システムの枠組は、21世紀COEプログラムの実績を受けて既に実質的に機能しているが、とりわけテーマ設定型博士課程後期課程大学院生や若手研究者(PD)の公募により、プロジェクト型研究集団へと展開した。研究科横断型かつ公開型、バイリンガルの「日本文化DH教育プログラム」を構築し、平成20年度から実施中であり、修士課程の学生をも取込んで、受講者が増加している。データベースやアーカイブ、GIS、Web環境など、DHの手法を縦横に駆使できる若手研究者が、技術的な情報交換をしながら自身の専門の研究方法を向上させる姿が定着してきた。日本学術振興会若手研究者ITPの採択を受け、海外の提携機関(大学・研究所・博物館グループ)での研究研修活動を活発に推進中であるが、さらなる受入れ組織の重層化を図っている。国際学術会議などでの研究発表を支援・促進しており、「日本文化」研究者の国際型への転換も進んでいる。さらに、海外の若手研究者の積極的受け入れを進めるため、米英の海外の研究者国際交流プログラム(KCJS、PMI2など)と提携、また東アジアの大学・日本学研究所への交換プログラム強化活動など、着実にグローバル・ハブ機能を形成しつつある。また、学内の学部・博士課程前期課程の教育システム(現代GPやJapan Studyなど)との連携を図り、博士号取得者輩出のための教育プログラムを構築中である。</p> <p>【研究】有形・無形文化財のデジタルアーカイブ活動の中に実践研究の場を設定し、人文学研究の深化を進める手法を確立。テキスト処理主体の世界のDHの動向に対し、マルチメディア型DHという新たな日本型DHの考え方を提案した。デジタルアーカイブは、世界に散在している文化・芸術コンテンツの統合を実現するが、ポストン美術館や大英博物館などとの共同デジタルアーカイブにより、世界レベルでのデジタル資源共有化と活用が進展した。文書・画像・音声・動画・身体動作データなどの異なるフォーマットや異分野のコンテンツを統合し、他機関のDBも連動させた関連付けを実現した。システム研究とコンテンツ研究、あるいは質と量とのバランスのとれた進展が課題となるが、DHは人文学研究の新展開を生むことを実感できた。地理情報システム(GIS)技術は、歴史地理学のツールとして強力に機能し、文化・芸術コンテンツの時・空間上での可視化のプラットフォームとして効果を発揮し、世界を代表する事例となった。また、Web2.0、Blogなどの双方向型ネットワーク基盤の活用によって、情報の共有・公開・活用、および研究交流の基盤としての研究ポータルが実現している。</p> <p>屏風や地図、浮世絵の熟覧システム、版木の総合DBと立体計測、邦楽・芸能資料の大規模DBとタイムライン化、舞踊などの身体動作の記録・分析、陶磁器や能面などの立体形状解析など、デジタルアーカイブ技術と人文学研究の連携が効果的な分野において成果が顕著である。京都の特徴である、精緻・繊細な文化財のアーカイブ化技術、歴史情報の解析技術の開発研究においても独自の研究成果が生れている。</p> <p>【海外連携】ロンドン大学SOAS(SISJAC、BM、V&amp;A)グループとの連携は、双方での研究資金確保など相互補完の関係となり、恒常的な人的交流がある。大英博物館との日本美術品デジタル化共同研究など新たな研究展開を行ったことで、本拠点が提案する若手研究者の実践的教育の手法は強いインパクトを与え、DH手法による連携でのイニシアチブを待望されている。欧米のいくつかのDH拠点からは、東アジアにおける現在唯一のDH拠点として一層の発展を期待されるに至った。日本文化の中心としての「京都」に裏打ちされた、日本文化DH教育研究のグローバル・ハブは、本拠点において、着実に形成されつつある。</p>	

#### ◇グローバルCOEプログラム委員会における評価

##### (総括評価)

当初目的を達成するには、助言等を考慮し、一層の努力が必要と判断される。

##### (コメント)

大学の将来構想と組織的な支援については、学内のグローバルCOEプログラムを世界水準の拠点として成長させることを意図し、学長のリーダーシップの下に、大学としての世界拠点化施策の中での的確に位置付けられていることは評価できる。

拠点形成全体については、順調に進捗しており、博物館との連携モデルの構築など、高く評価できる。また、若手研究者への学内支援の充実など、組織的な取組みも評価できる。しかしながら、本拠点の将来像については、より明解な構想を示すことが望まれる。

人材育成面については、「日本文化デジタル・ヒューマニティーズ教育プログラム」を構築するなどの取組みについては評価できるが、この中で、確実な文理連携を実現するための方策を練る必要があり、今後検討を加え、よりまとまりのある教育課程を設計する必要がある。

研究活動面については、ロンドン大学SOAS（大英博物館・ヴィクトリア&アルバート（V&A）博物館・セインズベリー日本芸術文化研究所）との連携、研究者相互受入等を通じた国際的な研究連携が成果をあげており、また、論文発表等については、総体として盛んに行われていることは評価できる。しかしながら、情報系に比べて、人文系の成果発表が少なく、改善の余地があり、更には、現状において、美術分野に傾いているように見受けられ、デジタル・ヒューマニティーズの推進によって、人文科学全体を前進させるという目的が明確となるよう、推進する必要がある。また、新しい分野を切り開いていることから、従来型の「電子図書館」や単なる「資料の電子化・アーカイブ化」とどのように違うのかについて、経費配分を重点化することも含め、発信と広報に努めることが必要であり、こうした研究活動が、学問的創造性として、これまでの人文科学の蓄積に加えて、どのような新しい知見が生み出されようとしているのかについて具体的に明確にする必要がある。

補助金の適切かつ効果的使用については、今後、成果の海外発信及び国際的な広報に、より資金を割く必要がある。